



日本キリスト教保育所同盟 (題字 前理事長・木村 量好)

THE ASSOCIATION OF CHRISTIAN NURSERIES IN JAPAN

事務局 かがわ子ども・子育て支援センター 神愛館 〒762-0056 香川県坂出市中央町8番58号
発行責任者 理事長 新井 純

「ともしびを守る人」

佐世保教会 深澤 燿

イエスさまが生まれたのは、暗く寂しい馬小屋でした。すきま風が吹きこむ馬小屋に小さな蝋燭が灯るように、イエスさまは生まれました。マリアとヨセフは一生懸命にこの小さなともしびを守ろうとしたに違いありません。そして神さまも、この小さなともしびを守るために、羊飼いや外国の博士たちを送ってくださいました。羊飼いたちの助けや博士たちの贈り物によって、馬小屋に生まれた頼りない小さいのちは、消えてしまうことなく守られたのでした。そうしてそのようにして生まれ、育ったイエスさまは、今にも消えてしまいそうなともしびを大切に守るお働きをするようになります。重い病気の人、いじめられ、仲間はずれにされている人、貧しくて食べ物のない人、そんな今にもいのちの火が消えてしまいそうな人をイエスさまは訪ね歩いて、その火が消えないように守られたのでした。

女性で初めてノーベル文学賞を受けたラーゲルレーヴに「ともしび」というお話をあります。

力自慢のラニエロは、乱暴な夫に愛想をつかして実家に帰ってしまった妻のフランチェスカの気持ちを取り戻すため、戦争で手柄を立ててやろうと考えます。十字軍の遠征にも加わったラニエロは、聖地エルサレムをイスラム教徒から取り返す闘いで大手柄を立て、その褒美に、エルサレムのキリストの墓に灯るとともし火の炎を自分の蝋燭に移すことを許されます。その夜、酒場で祝杯を擧げていると、一人のおじいさんがラニエロに言いました。「お前さんは戦争で手柄をあげて喜んでいるが、戦争で人を殺したりものを壊したりすることより、死んでいく小さな者を守る方が難しくて尊いことだ。お前さんはかよわいその蝋燭の炎を一晩だって守り通すことも出来はしない」。ラニエロはムキになって大声で誓いました。「俺はこのともしびを故郷のフィレンツェまで消さずに

運んで大聖堂の祭壇に灯してやる」。

こうしてエルサレムからフィレンツェまで、ともし火を消さずに持ち運んでいく奇妙な旅が始まりました。後ろ向きで馬に乗り、マントで風をよけながらそろそろと進むラニエロに、強盗が襲いかかります。普段なら、簡単にやっつけるところですが、ともし火を守るために、彼は無抵抗のまま身ぐるみをはがされます。町ではラニエロのおかしな格好を人々があざ笑いました。彼はいつものように腹を立てて暴れることも出来ません。黙々と嘲りに耐えて歩き続けました。十字軍に恨みのあるイスラム教徒から暴行を受けたこともありました。彼はそれにも反撃せず、ただ必死でともし火を守り続けました。時には良いこともあります。疲れ果てて眠り込んでしまったとき、親切な人が蝋燭の火を守ってくれていたり、予備の蝋燭が尽きてしまったときには巡礼のおじいさんが蝋燭を分けてくれたり。

ラニエロはこの旅で今までとはまったく違う人間に変えられていくのです。戦いよりも平和を愛し、荒々しいことよりも穏やかなことを好み、怒りや憎しみを抑えて我慢することができる者に。また、自分の力だけではどうすることもできないときには、人の親切や、天の恵みがあることを知りました。自分の腕っ節だけを信じ、人を思いやることない男だったラニエロはまったく新しい人間として生まれ変わっていたのでした。

小さなろうそくの火、消え入りそうな命を守り続けるということは、戦いで手柄を立てるよりもはるかにたいへんなことです。そしてそれはとても大切な、誇らしい仕事です。暗く冷たい馬小屋で、今にも消え入りそうな小さなともしびのようにこの世に生まれたイエスさまは、わたしたちにそのことを気づかせてくださいます。

「サンタと子ネズミたちのプレゼント」

佐 原 良 子

クリスマスの朝、お日様が登る前のまだ薄暗いとき、野原の大きなもみの木の下に、静かに静かにトナカイのソリが止まりました。乗っているのはサンタ爺さん。サンタさんは、夜中じゅうかかるでクリスマスプレゼントを配り終わって、ちょっと休もうと降りてきたのでした。もちろん、おなかはペっこペこ。おばあさんが作ってくれたお弁当も食べたくて、トナカイを休めたのでした。

実はサンタさんは80才になったので、今年のクリスマスでサンタの仕事を終えることにしていました。だから今日はお弁当も最後の特別弁当なのでご馳走のはずです。サンタさんは、お茶を一口飲んでほっとして、トナカイにも草をいっぱい用意しました。

そして、サンタさんは、トナカイの大きな身体を摩りながら、「お疲れだったね、お腹もすいただろ。沢山草をおあがり。お前さんのおかげで最後の仕事も無事に終えることが出来たよ。長い間の手伝いをありがとう」とお礼の言葉を言いました。

トナカイもよくわかったのでしょうか。頷くように首を上下に振りながら、むしゃむしゃと夢中で草を食べ始め、その横でサンタさんもお弁当を食べようとした時でした。

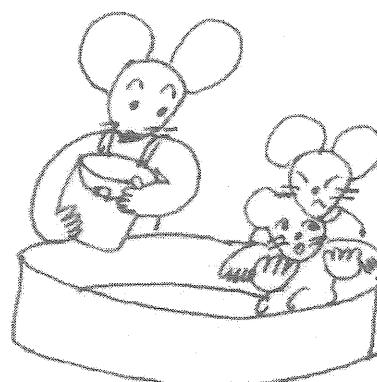
楽しそうな可愛い声がするのに気が付きました。子ネズミたちの声のようです。サンタさんはその声のするネズミの穴蔵を見つけました。中をのぞいてみたサンタさんは、思わず笑顔になりました。

どうやら五匹の子ネズミたちは、お父さんとお母さんが、朝早く仕事に出かけた後、仲良くお留守番をしているようです。

お母さんは出かける前に、みんなに一つ注意をしたそうです。それは、もう寒くなったので、風邪をひくから水遊びはやめてね、ということでした。1才になったばかりのいちばん小さいちゅうこは、水遊びが大好き！小さなプールに入って、お兄ちゃんが水を入れてくれるのを待っています。

するとお兄ちゃんは「よし、わかったよ」とバケツ一杯に何かを入れて重そうに運んできました。それを見て水だと思った2歳半のお姉ちゃんネズミは、あわててプールの外からちゅうこの両わきに自分の手を挟んで、ぬらしては大変と、必死になって、力いっぱい引き上げました。

お姉ちゃんの凄い力を見て、サンタさんもびっくりしました。



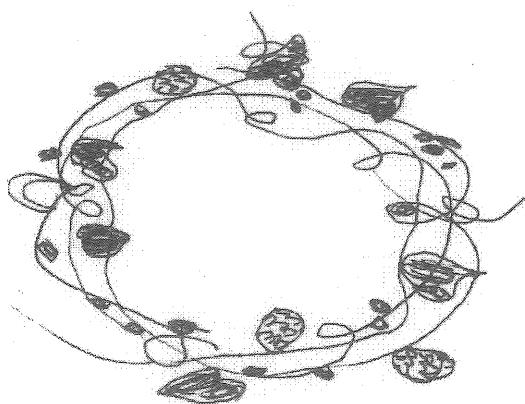
でも大丈夫。お兄ちゃんがバケツに入れて持ってきたものは、昨日みんなで野原で拾った赤い木の実やドングリ、松ぼっくりや畠の芋のツルでした。どっさりとプールに入れていっぱい遊びました。木の実を雨のように降らしたり、柱にあてっこしたり、高く積み上げたりして楽しく遊んでいる様子をサンタは見ていて思いました。こんな素敵なお子たちに、クリスマスプレゼントをあげたいなあ。

でもトナカイの荷車はからっぽです。何もありません…。

その時、サンタさんはお弁当があるのを思い出しました。今日のお弁当は特別のご馳走のはずです。

サンタさんは嬉しいお顔を輝かせながら、お弁当をもう一度きれいに包み直して、お手紙をつけました。そのお手紙には

「みんなが仲良く遊んでいる姿にサンタさんは幸せな気持ちをいっぱい貰ったよ。このお弁当は、お父さんとお母さんが帰ってきたら一緒に食べてください。サンタ爺さんからの“クリスマスプレゼント”です」



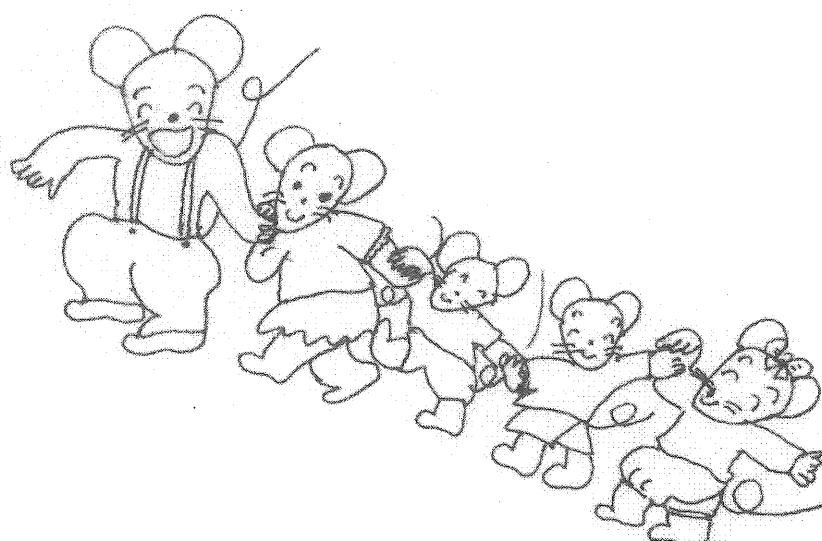
あげました。朝牛乳を配達してくれるおじさんにも渡すことができました。

夕方、お父さんとお母さんが帰ってきて、みんなでご馳走をいただきました。素敵なクリスマスになりました。お父さんとお母さんは、子どもたちが、リースを作って、クリスマスのプレゼントをしたことを知って、みんなもサンタクロースの仕事ができたことを喜んでくれました。

イエス様のお誕生のおかげです。

と書いて、入口にそっと置きました。そしてトナカイに「はい、どうどう！」と掛け声をかけて、勢いよくサンタ村に帰って行きました。お弁当に気がついたネズミたちは、チューチューチューチューと嬉しくて踊り始めました。そして今日がクリスマスだと知ったお兄ちゃんは、何年か前にお父さんやお母さんと作ったクリスマスリースを思い出して、弟や妹と一緒に、プールの中のドングリや木の実を使って可愛いリースを幾つか作りました。

入り口にも飾って、両隣のおうちにも、一つずつ



「苦しいときに傍にいてくださる存在」

熊本YMCA本部事務局

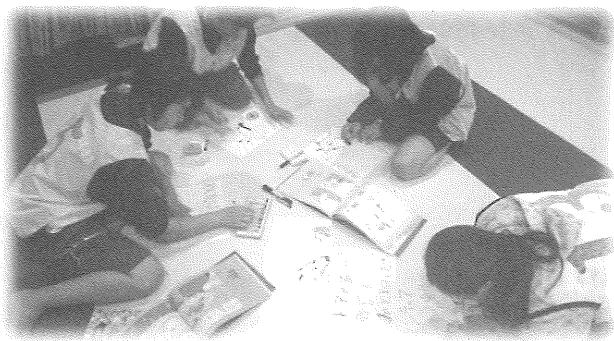
災害対策本部長 神 保 勝 己

熊本YMCAにおいては、本館はじめ、多くの施設が被災し、職員の半数位以上が何らかの損壊となり、全壊、大規模半壊となった職員もいました。そんな中、イエス様に導かれるままに、YMCAの職員は、熊本地震の復興支援活動を始めました。明日の希望の見えない多くの被災者に寄り添う活動をスタートしたのです。その対応においては、全国のYMCAの仲間、全国各地の教会をはじめ、多くの方々を被災地へ送っていただいたり、温かいメッセージや募金をいただいたりして、今日まで活動を続けることができています。この後方支援なしには、熊本YMCAの復興支援活動は成り立ちません。改めまして、多くのご支援に感謝致します。

この地震という出来事を「まさか」となかなか受け入れることはできませんでした。特に2回目の本震後には、これからどう生きるか？どうなってしまうのか？多くの方々は、そのような状態だったと思います。人の生きる力を支えるためには「三つの柱」があると緩和ケアセミナーの講師の先生がおっしゃっていました。このことを今回の震災支援では、特に意識しました。それは将来こんなことをしたいという夢が、今を生きる力を支えるための「時間」の柱。家族や仲間など支えとなって、人を生かしている「関係」の柱。自分のことを自分で自由に決定するという、生きる上で支えとなる「自律」の柱。この三本の柱がしっかりとていれば人の存在は安定するというのです。けれども、どうしてもそれが折れてしまう時があるのです。それが、今回の地震だと思います。家が全壊となって、もう生きていけない、死にたいと思う方があります。この「時間」の柱が折れてしまったときには、家族の支えなど「関係」の柱を自覚することで、存在の安定を取り戻すこともできるのです。人生は平坦ではありません。予測なしに、多くの苦しみや悲しみが襲ってきます。でも、その支えとなる「何か」があれば、苦しい中にあっても生きていくことができます。その「何か」＝「イエス様」を私たちは持っている幸いを感じています。つまり、苦しい時であっても、その闇の中で、家族や仲間、人ととの関係性の中に神様がいること、そして

神様に支えられている自分に気づくことで、また、その闇の中に光を見出していくことで、乗り越えていくことができるのです。また、私たちは困難な状況にある人の隣人となって、光となることで、ありのまますべてを受容することができればすばらしいことだと思います。弱さ、無力、苦しみの中だからこそ、輝く力というものの存在が感じられるのだと思います。

その輝く力を表していただくこのクリスマスの祝福を感謝致します。



「2016年のクリスマスを迎えるにあたって」

熊本YMCA尾ヶ石保育園

園長 久 保 誠 治

熊本YMCAは阿蘇に4つの保育園を運営しています。今年のクリスマスを迎えるにあたってイエス様のご降誕をお祝いすると同時に、今自分たちがここに活かされている意味は何か？園児と共に考えてまいります。

2016年4月14日（木）午後9時26分前震、4月16日午前1時25分（土）本震と、震度7の地震が立て続けに起こり、熊本・阿蘇は大きな被害を受けました。その後、国内外より多くのご支援をいただき、ここに改めてお礼を申し上げます。特に熊本地震発災後、心がけていることは災害を経験した園児に対して、日常保育を通じ“心のケア”を行なうばかりか、心身ともにより豊かで、たのもしい大人に成長する支援をすることです。

ボールを投げすぎると手にマメができます。潰れると痛いですが、その後皮膚は角化して硬くなり、以前より強い皮膚になり、もっと沢山のボールを投げることができます。心の傷も適切な対応により、成長し、より強くなることができます（外傷後の成長：Post Traumatic Growth.）。

本震の時に寝ていた子どもの多くは、何が起きたのか分からぬまま避難生活を始めました。周囲から「びっくりした。恐かった」と聞いて、後付けで恐怖を取り込んでいるケースがあります。まずは親が安心感を得ることが大切です。子どものトラウマは放置すると悪化し、思わぬ形で芽吹きます。子どもたちの支援には、遊びを交えることが重要です。「びっくり」は悪いことばかりではありません。突然くまモンにあったらびっくりしますが、それは楽しい「びっくり」。“恐い”“びっくり”を、“楽しい”“びっくり”へと入れ替えることが心のケアにつながります。

同じように、クリスマスの意味が「神さまがひとりごイエス様を私たちのためにくださったことを心から感謝し、真の意味を知って主イエスキリストの誕生を祝う日」として準備を進めてまいります。

「自立へ向けた寄り添い」

木山仮設団地地域支え合いセンター

所長 日 野 充 裕

益城町は今回の熊本地震で震度7を2回経験しました。その中で自宅が全壊や大規模半壊などで住めなくなったり方々が多数おられます。そのような方々が、避難所生活から自立へ向けた一歩目として、また再建するために利用されるのが仮設住宅です。

熊本YMCAは、益城町の数ある仮設団地のうち中規模となる木山仮設団地220戸に居住される方々を支援するために、益城町社会福祉協議会からの委託をうけて木山支え合いセンターの運営を行っています。戸別の訪問をしての見守り活動や課題をもち専門的な支援を必要とする住民の方を専門的な機関等につなげる働きをしています。またサロン活動もを行い、茶話会や手芸等を通して住民の方々の交流活動も行っています。自治会もできており、自治活動の支援も行ってコミュニティづくりも行っています。

これから寒い冬になっていきますが、仮設団地ではクリスマスやお正月をここで迎えられる方がほとんどです。住む場所こそ違いますが、豊かな年末年始を過ごしてほしいと思っています。住民の方が仮設団地で迎える初めてのクリスマスです。色々な団体が12月にはクリスマスのイベントをされることでしょう。おそらく今までにない特別なクリスマスを迎えられるのではないかと思います。私たちは本当のクリスマスの意味をみなさんにお伝えし、神様の祝福が豊かに注がれることを祈るばかりです。YMCAが支え合いセンターを運営している意味はそこにあるのではないかと思っています。社会福祉協議会から委託を受けての関係上、表立ってキリスト教色を出していくわけにはいかないところもありますが、私たちの仮設住宅で生活する方々に対する言動や行動、関わり等によってちりばめることができるのでないかと思っています。熊本地震の被災者の方々にも神様の豊かな恵みがあるように、また幸せなクリスマスが迎えられるようにお祈りください。



仮設団地の戸別訪問

事務局だより

クリスマス献金のお願い

バングラデシュの子ども達・お母さんたちを支える
新たな協力関係づくり

今年も6月12日から1週間ほどの予定で、バングラデシュへ行ってまいりました。世界中を驚かせる重大事件が起こってしまって、大変驚いています。武装した者が、レストランで食事中の外国人を襲い、日本人を含めて20名の犠牲者と多くの負傷者を出したテロ行為です。このことにどこに向ければいいのか分からぬ憤りを感じています。

バングラデシュを訪問し、毎年里帰りのように同じ地域の農村部で過ごし、地域の子どもたちやそのお母さん達と交流し、少しでもお役にたてるようにと、支援を続けてきました。現地のスタッフはもちろん、近くの商店や、ホームステイ先等友情の輪が広がっていました。大きなかばんにたくさんのおもちゃや、文具、古着を詰めてやって来て、帰りはその空いたスペースに、お母さん達が手作りした、「ノクシカタ（伝統刺繡）」の商品や記念品を買って帰り、多くの皆さんに買っていただき、それをまた資金に購入するという、少しでもフェアトレードの真似事みたいになればと頑張ってきました。

訪問には、今まで数多くの保育士も同行し、スタディーツアーとしての重要な性格もありました。現地で体験したこと、感じたことは、先生達の人生観・世界観を新たにさせるものだったと感じています。ともにバングラデシュに行った先生達も今回の事件には大変驚いていると思います。そして、いつもわたしたちのことをお世話してくれていた、シャイで親切なバングラデシュの彼らは、今どんな思いでおられるだろうと心配しています。

今回は、今まで支援していました団体が活動を縮小したため、新しい支援先との共通理解と、実際の現地の様子を知るために訪問しました。今までの地域と違い、首都ダッカから船で一晩かけて、メグナ川を南に降りていかねばならない地域です。ボリシャル、クルナという海に近い、洪水の被害に遭いやすい地域です。ですから北部に比べ、より支援を必要としている人々が多い所もあると、事前の話で聞いていました。

新しいカウンターパートは、『World Concern Bangladesh（ワールドコンサーンバングラデシュ）』です。この団体は、子ども達、お母さんたち、障がい児者のプログラムを多く実施し、実績もあり地域に信頼されている団体のようでした。まだ調整準備段階ですが、継続してご報告申し上げます。また、スタディーツアーについても、様々な観点から可能性を探っていきたいと思っています。

もうすぐクリスマスです。バングラデシュの子ども達を応援してあげてください。献金をよろしくお願いいたします。

国際部 堀 井 忠

クリスマス献金のお願い

バングラデシュの子どもたちのために
福島の子どもたちのために
「災害支援金基金」のために
キ保同の働きのために